

○研谷悦子 浅野正子 伊藤紀之

(共立女大)

目的 現在、数多くある西洋服装の研究において、ジュエリーはかならず挙げられる装飾品のひとつであるが、服の種類との関係やその装い方などに詳しく言及したものはあまりみられない。また、ジュエリー自体の研究も海外にはあるがその歴史を追ったものが主である。そこで西洋服装文化を理解するうえで、今まであまり論じられなかったジュエリーと衣服との装い方の関係を検討することを目的とした。

方法 今回は共立女大所蔵の"ギャルリー・デ・モード・エ・コスチューム・フランセーズ (Galerie des Modes et Costumes Français) 1778~1787" を中心に調査を進めた。図版を服種で分類し、ジュエリーの歴史をふまえながらそれぞれの装い方の特徴を見ていった。

結果 今回の検討では、明らかに服種によるジュエリーの傾向が見られた。宮廷服ではやはり一番多くジュエリーが使われている。ローブ・ア・ラ・ポロネーズやア・ラングレーズなどには比較的多種のジュエリーが示されているが、その他のドレスにはまったくジュエリーが付けられていないか、イヤリング程度でしかなかった。また、さまざまな服種への対応は、別のジュエリーを装うというよりは、主にその組み合わせの変化によって行なっていたようである。